

# テレカコレクション

< ミステリー 編 >

健

自分のミステリーの原点と言えば江戸川乱歩の「怪人二十面相」「少年探偵団」だ。映画・ラジオ・TVでもシリーズになり子供には超人気の作品だった。漫画では藤子不二雄が原作を忠実に漫画化しているが小説は読んでいなかった。読みきっかけになったのは隣町へ遊びに行った時にたまたま貸本屋を見つけたからだ。その頃は貸本屋も珍しい存在になっていたが中に入ると乱歩やルブランのルパン、ドイルのホームズものなどが並んでいた。新本を買う小遣いは無かったのでそれからはしょっちゅう通うようになってしまった。あらかた読み尽すと別の本屋を探し次第に駅の方へ足を伸ばすようになり古本屋の固まっているところを見つけた。本の多さに驚いたが相変わらず小遣いが無いので立ち読みの方が多くしょっちゅうはたきで追い出されていた。



乱歩を読めば当然、エドガー・アラン・ポーにも興味が湧く。ポーの作品では推理小説よりむしろ幻想小説のほうが好きだ。特に「早すぎた埋葬」は死んだ後、棺桶の中で生き返るかもという妄想に取り付かれるようなリアルな作品だ。これとは違う意味で怖い話だと思ったのがエド・マクベインの「天国と地獄」。黒澤明が映像化してよく知られている作品だ。富豪の息子と勘違いして使用人の息子を誘拐した犯人は構わず富豪に法外な身代金を要求する。他人の子に多額の身代金を払えるか？払わなくても社会的地位の失墜は明白でさまざまな葛藤が交錯する。自分だったらと考えると身につまされる話で今なら無差別テロに匹敵する憤りを感じた作品。ヴァン・ダインの「ドラゴン殺人事件」「グリーン家殺人事件」など「——殺人事件」ものは比較的好きな作品だった。





ところで推理小説に付き物なのが名探偵の存在。だが今時、事件の解決者として探偵という職業はそぐわないので刑事が一般的だがいろいろな職業の探偵役が登場している。「家政婦は見た！」なんていうのはその最たるものだろう。自分が好きな探偵と言えばやっぱり明智小五郎だ。「D坂の殺人事件」「心理試験」などは好きな作品だが少年向けの作品を除くと明智小五郎が登場する作品は存外少ないのが不満ではある。

横溝正史の金田一耕介も明智に匹敵する人気があるがこちらは作品の傾向上殺人の阻止がせいぜい最後の一人。有能な感じのしないところが難点。それでも映画の「犬神家の一族」を初めて見たときは結構インパクトがありおどろおどろ



した雰囲気が良く撮られていて良かった。乱歩も猟奇的な部分で負けていないが作品以上に凄いのが蒐集と記録癖だ。戦時中に執筆禁止を受けた際に自己の半生に関する資料をスクラップと書き込みによる貼り混ぜ年譜を作成し家計やら新聞記事の告知から

すべて徹底して残している。また海外のミステリーをいち早く紹介し日本にミステリーを根付かせた功績は大きく蔵書の数も半端ではない。



古い話になるが平成5年は乱歩生誕 100 年ということで各地で催し物が開催された。池袋の東武百貨店の展覧会では上記の貼り混ぜ年譜も展示されていた。この時の目玉が乱歩の蔵だった。子供の頃の噂では乱歩はこの蔵の中で一人ローソクを灯し執筆していたといういわくつきのものであったが事実では無く出版社の演出だったようだ。ともあれ蔵の中が見られるというので興味津々だった。蔵は立教大に隣接していたが結構新しい。一度改修されているからだがそれでも外部から見た感じは結構異様ではあった。蔵の隣の乱歩邸では当時の書斎を再現して展示されていたががっかりしたのが蔵の展示。入口から少し先は全面アクリルで遮られていて奥へは入れず異様に並ぶ本棚と蔵書を見渡すだけだった事だ。後ろがつかえているから眺めるのもせいぜい2,3分ちょっと馬鹿馬鹿しかった。

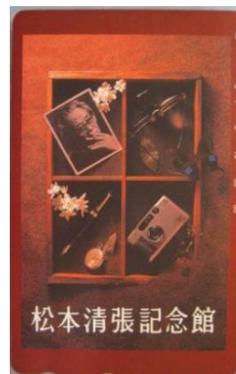
以前 DOKU-GAKU のアンケートで「推理小説作家」で浮かぶ顔はというのがあった。



結果は松本清張が多かった。映画化、TV化された作品も数多く作品を読んでいる人でもよく知られている作家なので納得できるものではあった。今年の6月「松本清張あらかると」が光文社知恵の森文庫から発刊された。著者は阿刀

田高、松本清張ファンを自認している。この本は著者が編纂した「松本清張小説セレクション」全36巻の各巻末に解説として載せたものを一冊にまとめたもの。いわばあとがきだけで一冊作るようなもので変わった趣向ではあるが

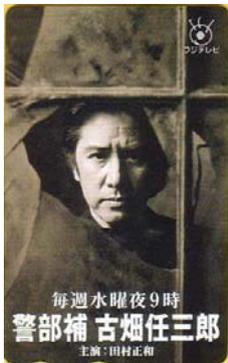
全集の刊行後にこの本を発行することが最初から約束事だったそうだ。従って単に解説だけでなく実作者の視点、推理小説に関する私見などを盛り込みエッセイ仕立てにし独立した読み物になっているところがユニーク。タイトルのあらかるとは清張作品の魅力を一品料理のごとく一つ一つ解き明かして行こうという趣旨ということだ。清張作品を読んで何となく感じていたことを明確に文章で書かれると改めて自分の思っていたことが形になって整理された思いがする。この本には清張のエピソードやちょっとした小ネタなどもある



清張作品の特徴の一つに捜査で各地を飛び回るシーンが多いが作品の発表が「旅」という雑誌が多かったからではというのはこの本で知った小ネタ。清張の映画化された作品で名作の評判が高いのが「張込み」だ。モノクロの作品で犯人と過去に関係のあった女の家を張り込む話で監視する行為、監視されて

いるとは知らない女の素の平凡な日常、犯人が現れた後の女の表情の変化など臨場感のある作品となっている。リアルタイムではないが場末の映画館で観ている。中学生の頃だと思うがお目当ての三本立てを観に行ったとき一回目の上映の前に予告なく上映された。この時は観たいわけではなかったのですが今も場面が記憶に残っていることを考えるとそれなりの感動があったのかも知れない。同様に内容は全然覚えていないのに場面の記憶が残っているものに「見知らぬ乗





話を戻すと現代は本格ミステリー作家を標榜する作家には受難の時代とも言える。あらゆるトリックが出尽くしたといわれている時代だからでトリックの盗用をする



客」がある。これは洋画専門の映画館でホラー映画と併映になったときに観たのだと思うが小学生だったから字幕を読むのもおぼつかなかったから内容を覚えていないのも当たり前なのだが電車の中のシーンだけは印象に残っている。この作品は「交換殺人」のトリックを知らしめた作品で有名。それゆえに不気味な雰囲気が記憶に残ったのかもしれない。

ところでミステリーとは何かだが一般的には犯罪の発生に起因する物語で犯人、犯行方法、動機などが一部または全てが最後まで明らかになっていない作品を指し、読者(観客・視聴者)が自ら推理に参加できる楽しみを提供する特異なジャンルではある。従ってネタばらしはご法度だ。ネタばらしされたとたんに読むのを止める者もいるくらいでケンカの種にもなる。

自分の場合はネタばれで興味を失うようじゃしよせんそれだけの作品と思っているからあまり気にならない。謎解き主体となるとショートショート作品はともかく内容がパズル化し一度読めば終わりにってしまう。「刑事コロンボ」は最初に犯行の全貌を明らかにしておいて犯人の動機や人物像に関心を持たせ真相に迫る過程をドラマ化したものだが繰り返し見ても飽きない。推理小説の文学性なども作家同士で論争の種になってきたが清張作品のように読んだ後にいろいろな社会問題や人間模様の知識が残るのはいい事と思っている。余談だが

が映画評論家の水野晴郎の定義によればミステリーは最後まで犯人がわからないもの、サスペンスは最初から犯人が分かっているものとある番組のクイズの回答になっていた。実際には説明の中に主体が謎解きか恐怖感かという言葉も付随しており説明不足と思ったことがある。コロンボや古畑任三郎をサスペンスと感じる人は少ないと思う。TVの「火曜サスペンス劇場」なども内容がミステリーの作品は多い。

気がなくても同じようなことを考え付く事も多いわけで作家自身も編集スタッフも過去の作品に特に神経質にならざるを得ない。最近では心霊探偵などと言うものも出てきて本格からますます遠のいて行く作品も多くなっている。

